

平成19年4月28日～30日京都仁和寺個展

御挨拶

この度、真言宗御室派総本山仁和寺御室会館をお借りいたしまして、芝不器男・正岡子規の俳句を書表現し、皆様方にご披露させて頂くことになりました。愛媛県松山市出身の私が大好きな京都で個展を開催することができますのは、望外の喜びでございます。

私は、2000年よりヨーロッパへ出展する機会を得ることができました。イタリア、スペイン、フィンランド、ロシアにおいて作品披露、パフォーマンス、マスコミを通じ日本の伝統文化、特に書についてお話をさせていただきました。その時、感動と驚異の目を向けられたことによって、芸術には国境がないと実感いたしました。

彼らの文化的センスは、実に鷹揚であり自分に欠如するものに会おうと率直に認め、相手に惜しみなく拍手を送るのです。

このことから、書が芸術として確かに位置付けられていることを確認することができました。

ヨーロッパにおいて評価を受けることにより私の俳句書は、ハードルをひとつ越えると同時に、自信へ繋がり精神的エネルギーが益々増幅してまいりました。その結実が不器男俳句書の出版でございました。

私は従来の既成概念にとらわれない、自由な発想で芝不器男・正岡子規の俳句を素材として、書表現しています。

表現するということは、それぞれの素材から具体的な情景が心の中に描き出され、不器男の、子規の心象風景が見えてきたとき初めて筆を持つことができます。心象風景が見えてきましても、はじめにイメージしたことが表現していくうちに変形してきます。その変形は私が意識したものではなく、無意識の世界から発したものです。自然に不器男が、子規が、筆を持たせてくれたとき素材の深層までエネルギーを注ぎこんだ瞬間なのです。このプロセスによって、私の作品、俳句書が生まれます。

俳句への情熱を燃やしながらか「志」半ばに若くして逝った、燦然と光彩を放つ愛媛が誇る両雄の姿を甦らせたいという、私の強い想念が、筆を通してダイナミックに構築してまいりたいと考えるに至りました。

何卒、作品を全体観から捉えたり、視点を1点に絞ったり又、ズームインしたりしながら、ご高覧賜り、ご批評、ご教示をいただければ幸甚でございます。

.....
・ HAIKU

- ・ 不器男がいて 子規がいて そして 石丸繁子の書があります
- ・ 私くしの息吹を 感じていただければ 幸せでございます 感謝

全紙1枚に書く(サイズ136×68)